カサンドラ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カサンドラ

【Ｎコード】
Ｎ８４３１Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
アポロンの呪いによりその予言を信じてもらえなくなったカサンドラ。だがたった一人だけ彼女の言葉を信じる者がいて。ギリシア神話から題材を取りました。

第一章

カサンドラ

この世で最も悲しいことがあるとすると。その一つは誰にも信じてもらえないことだ。それはまさに彼女のことであった。

カサンドラ。栗色の豊かな波うつ髪に細かい清らかな肌、紅の薄く気品のある口元に穏やかな鳶色の目。トロイアの姫であり絶世の美女でもある彼女はまさにその悲しみの中にいた。

彼女は美しいだけでなく聡明だった。その賢さでも知られていた。そのうえ彼女は予言をすることができた。しかも只の予言ではなかったのだ。

必ず当たる。外れることはない。しかしそれを信じてもらうことはできなかった。それには理由があったのだ。

彼女はデルフォィにて予言の力を与えられた。だが類稀なる美貌を持つ彼女はデルフォィで信仰されている予言の神アポロンに見初められた。彼は予言の神でもあったのだ。

彼はすぐにカサンドラの側に来て。こう囁いたのだ。

「私の妻の一人になるのだ」

こう。優しげだがそこには好色が明らかにあった。そんな声であったのだ。

「どうだ、妻になるか」

「いえ」

しかし彼女は。ここで言うのだった。首を横に振りつつ。

「私はそれは」

「嫌だというのか」

「申し訳ありません」

俯きながらアポロンの言葉に答える。

「私は。とてもアポロン様に適うような」

「それは違う」

アポロンはカサンドラのその言葉を否定した。
「そなたは美しい。だからこそ」
「ですが私は神ではありません」
そう言われても首を横に振り続けるカサンドラだった。
「ですから。私は」
「私の誘いを受けぬというのだな」
「申し訳ありません」
また言うのだった。
「それだけは」
「そうか。わかった」
アポロンはカサンドラの今の言葉を聞いて憮然として頷いた。
「そなたの心。よくわかった」
「申し訳ありません」
「これ以上はいい。私もそなたを求めない」
その憮然とした顔で告げるアポロンだった。その端整な顔が不機嫌そのものになっていた。
「もういい。早く祖国に帰るがいい」
「トロイアに」
「そうだ。だが一つ言っておこう」
ここで彼は言うのだった。その憮然としたままの顔で。
「そなたの予言は外れることはない」
「私の予言は」
「その通りだ。必ず当たる」
また言う。まるで彼女の心にそのまま刻み込むようにして。
「しかしだ」
「しかし？」
「そなたの予言を信じる者はいない」
言葉に残酷さが宿った。それと共に惨い笑みも。端整なだけに凄惨なものがあるアポロンの言葉と笑みだった。
「決してな」

「決して。私の予言は」
「外れることはないが信じる者はいない」
あらためてカサンドラに告げてきた。
「決してな」
「そんな。それでは」
「そうだ。そなたの予言は何の意味もなさないのだ」
これ以上はないという残酷な言葉であり予言だった。予言とは誰かが信じるからこそ予言なのだから。アポロンはカサンドラにこれ以上はない術をかけたのだった。
だがここでアポロンは思い直した。それではあまりにも惨たらしいと。彼にも自分を振った相手へのあてつけに対する後ろめたさがあったのだろう。ここで言うのだった。
「しかしだ」
「しかし・・・・・・」
「一つだけ言っておこう」
こうカサンドラに言ってきたのだった。
「そなたのその誰も信じない予言をだ」
「はい・・・・・・」
「信じる者はこの世で一人だけ現われる」
「この世で一人だけ」
「そうだ。一人だけだ」
彼はまたカサンドラに告げた。
「一人だけだ。その者に会えばそなたは助かるだろう」
「私は・・・・・・救われる」
「その者に巡り合えることを祈るがいい」
最後にこう告げてカサンドラの前から姿を消すアポロンだった。
一人になった彼女は絶望の中に一条の希望を感じながらデルフォイを後にした。そのままトロイアに戻ったがやはり彼女の予言を信じる者はいなかった。
「兄様が戻って来ます」

彼女はまずこう予言した。
「このトロイアに」
「兄様！？兄様ならもういるじゃない」
「そうよ」
まず彼女の姉妹達が彼女の言葉を笑って否定した。
「ヘクトール兄様が」
「他に誰がいるのよ」
「それは・・・・・・」
彼女はその兄の名を知らなかった。だから答えることはできなかった。答えることができないので俯くことだけしかできなくなってしまったのだ。
「ほら、見なさい」
「貴女はずっとデルフォイにいたから知らないのよ」
「そうそう」
姉妹達はこう言ってカサンドラの今の予言を否定した。そしてこれは姉妹達だけでなく両親も宮中の家臣達も、そして民達もであった。やはり誰もカサンドラの言葉は信じなかった。
「そんな筈がない」
「有り得ない」
こう言ってだ。彼女の予言は誰にも信じてもらえなかった。しかしトロイアの街の酒場で一人だけこう言う者がいたのである。
「そうだな。戻って来られる」
彼は言うのだった。茶色の髪を茸に似た形に切っている彫の深い顔の若者だ。その名をイオラトステスという。トロイアの貧しい貴族の息子である。トロイアにおいては軍の士官を務めている。
彼はその日酒場で飲みながらカサンドラがそのことを予言しているのを聞いた。そうしてそのことを信じずにせせら笑う同僚達に対して告げたのである。
「あの方が」
「あの方！？」

「あの方とは誰なんだ？」
「パリス様だ」
その名も言うのだった。水で割った葡萄酒を飲みながら。
「あの方が戻って来られる。このトロイアにな」
「パリス様って誰だ！？」
「さあ」
「聞いたこともないな」
士官達は顔を見合わせて言い合う。彼等にとってははじめて聞く名前だった。だから知らないのも当然だった。しかし彼は知っているのだった。
「それは誰なんだよ」
「トロイア王家の方だよな」
「そうだ。カサンドラ様の仰っていることは正しい」
そしてまた葡萄酒を飲むのだった。
「きっと来られるぞ」
彼は酒場でこう言うのだった。だがこのことはカサンドラの耳には入らず彼女はアポロンの言葉を思い出し悲嘆にくれるだけだった。そしてそれから暫くして。
見事な金髪に黒い目、アドニスを思わせる中性的な顔立ちをした麗しい青年がトロイアにやって来た。その彼こそは。
「パリスです」
「パリス！？」
「まさかそなたが」
「そうです。父上、母上」
王と王妃にパリスと呼ばれたその若者は微笑みそのうえで二人の前に片膝をついた。そのうえで静かに述べるのであった。
「只今戻りました」
「生まれてから。何処かに消えたと思っていたが」
「どうしてここに」
「これは偉大なるアーレス神から聞いた御言葉です」

彼はここでアーレスの名を出した。言わずと知れた戦いの神である。外見は美青年だがその性格は粗暴で殺伐としていることで知られている。

第二章

「私は。生まれてすぐにある盗賊に攫われ羊飼いとして暮らしていたと」
「羊飼いに！？」
「攫われたことは知りません」
まだ赤子の彼がそのことを知る筈もなかった。
「そのままマケドニアの羊飼いに拾われそこで暮らしていました」
「マケドニアに」
「あの様な遠くで」
「その通りです」
マケドニアはギリシアの北にある。ギリシア人から見ればトロイア人と同じ異邦人である。この時代はバルバロイと呼ばれ蔑まれていた。アーレスを信仰していた。
「そこで暮らしていましたがある日アーレス神の神殿にいつものように礼拝をしていますと」
「そこで言われたのか」
「ぞなた自身のことを」
「その通りです。ですからここに戻って来ました」
その眩いばかりに整った顔でまた両親に告げるのだった。
「このトロイアに」
「だがその証はあるか」
「これでございましょうか」
王の言葉に応えて左肩を見せる。そこには青い剣の形をした痣があった。
「この痣のことでしょうか」
「その通りだ。見よ」
王もまたここで左肩を見せた。そこにあるのは同じものだった。
「これだ。これこそが」

「はい。何よりの証です」
静かに述べるパリスであった。
「これこそが」
「そうだ。我がトロイア王家代々にある証」
その痣こそがだった。これでパリスが誰なのかはっきりした。
「我が息子よ」
「父上・・・・・・、母上・・・・・・・」
「そなたを迎え入れよう」
親子は今お互いの顔を見合わせて感激に打ち震えつつ言葉を交えさせた。
「今ここにな」
「有り難き御言葉」
こうしてカサンドラの予言の通りになった。トロイアの者達は彼女の予言を嘲笑ったことを忘れて今は彼の帰還を喜ぶのだった。だがカサンドラはここでまた予言をするのだった。
「滅びるわ」
「滅びる!?何がですか」
「このトロイアが」
トロイアに古くから仕える神官ラオコーンに対して答えるのだった。
「パリス兄様のせいで」
「またどうして」
「ヘレナ様を手に入れられて」
こう言うのである。
「そのせいでギリシアの軍が来て」
「ヘレナ様といいますと」
ラオコーンはその名を知っていた。彼だけではなくトロイアの者もギリシアの者も全てが知っている名であった。その名を持つ者こそは。
「あのギリシアきっての美貌を持つと言われている」

「そう、スパルタ王妃の」
「あの方をですか」
「兄様は望まれます」
彼女はまた言った。憂いと怯えに満ちた顔で。
「ヘラ様とアテナ様とアフロディーテ様のどれかを最も美しいと問われ」
「そして？」
「アフロディーテ様を選ばれてこの世で最も美しい美女を与えられるのです」
「それがヘレナ様ですか」
「そうです」
項垂れてラオコーンに答えた。
「その方こそが。そしてそれによりトロイアは」
「滅ぶと」
「ギリシアで最も美しい方を奪われたギリシアは必ずやその軍を集めます」
これはヘレナの夫を選ぶ時に決められていたことなのだ。若しヘレナに何かあればギリシアは一致団結して彼女を救うと。そう決められていたのである。
「そしてトロイアに来て」
「馬鹿な」
だがラオコーンは彼女のその予言に首を横に振った。
「そんなことは有り得ません」
「どうしてですか？」
「パリス様は聡明な御方です」
まだ戻って来て間もないが既にその評価を手に入れていたのである。確かに彼は聡明で物事の受け答えだけでなく学識もあり音楽にも秀で人柄も円満だった。兄にヘクトールがいるので次の王でこそなかったがそれでも皆からその将来を期待されていたのだ。その彼がまさか、ラオコーンでなくとも思うことだった。

第三章

「それがどうして」
「神の御力は絶対です」
カサンドラは嘆くようにして言うのだった。
「ですから。パリス兄様とて」
「カサンドラ様」
ラオコーンは宥めるようにして優しい声を彼女にかけた。
「落ち着き下さい」
「私はもう」
だがカサンドラは取り乱した声でラオコーンに応えるのだった。
「見てしまったから」
「このトロイアがどうして滅びるのですか」
そもそもラオコーンにはこのことが理解できなかった。今この時は。
「この繁栄を極め精強なトロイアが」
「私の予言は外れはしない」
カサンドラの今の言葉は嘆きだった。
「けれど誰も信じてはくれない。それがアポロン神の呪いなのだから」
「とにかく。御安心下さい」
やはりラオコーンは信じてはいなかった。それでも心優しく忠誠心のある彼は自国の王女を気遣い落ち着かせようと腐心していた。
「その様なことは」
「私の言葉は」
カサンドラは語りつつ嘆く。
「一体誰に信じてもらえるというの？」
「誰に？」
「お父様にもお母様にも信じてもらえず」

涙を流しながら語る。
「勿論お兄様達にもお姉様や妹達にも」
「カサンドラ様・・・・・・」
「貴方も貴族達も民衆も誰も信じてはくれない。そして不幸ばかりが来てしまう」
「それは・・・・・・」
「悲しい運命、惨い呪い」
天を仰ぐ。宮殿の中なので天は見えない。しかしそこには太陽があった。彼女に呪いをかけた他ならぬその神が。そこにいるのである。
「その為に私は。こうして」
そして言うのだった。
「一人だけいるというあの方は」
絶望の中でデルフォイでのアポロンの言葉を思い出していた。
「あの方は来られるの？私の前に」
それが誰かもわからない。カサンドラにも。それがトロイアの中にいることも。彼女は知らなかった。今はただ嘆き悲しむばかりであった。己の惨たらしい運命の前に。
カサンドラの予言はまたしても当たった。パリスはスパルタからヘレネを手に入れて来た。兄のヘクトールは宮殿で弟とその美女を見て。すぐに言った。
「返すがいい」
「何故ですか？」
「彼女はスパルタ王の妻だ」
彼はまず弟に対して道理を語った。
「そなたは別の妻を手に入れろ。彼女だけはならん」
「ですがアフロディーテ神に告げられたことなので」
「ではヘラ神かアテナ神の言葉に従え」
三柱の女神のお告げのことは彼も知っていた。だからこそ今ここで弟に対して言うのだった。彼とてもヘレネを見ていないわけでは

なかったがそれよりも道理を優先させたのである。
「よいな」
「ですが兄上」
パリスはそれでも言う。
「私は元々アフロディーテ神の信者ですので」
「逆らえぬというのだな」
「そうです。それではです」
パリスとて愚かではない。彼もまた一つ提案を出して来た。
「彼女には指一本触れません」
「指一本か」
「今までもそうでした」
不思議な所で道理を守る男ではある。
「ですからこれからも」
「そのうえでの妻か」
「これならどうでしょうか」
あらためて兄に対して問う。優美な外見の己とは違い長身で逞しく雄々しい美貌を持つ兄に対して。ヘクトールはトロイアの次の王であると共にトロイアきっての英雄なのである。
「彼女には一切何もせずトロイアの賓客として扱うということで」
「ならばそうするがいい」
これ以上の説得は無理だと悟ったヘクトールはこう弟に告げた。
「それで御前が満足するのならな」
「有り難き御言葉」
「だが。彼女が何かわかっているな」
「ギリシア一の美女です」
パリスはこう答えた。だがもう一つのこともわかっていた。
「そしてスパルタの王妃です」
「スパルタ王はギリシアの盟主アガメムノンの弟」
スパルタはこの頃からギリシアきっての尚武の国だったがそれだけではないのだ。王はギリシアの盟主アガメムノンの弟でありそれ

に。
「そしてギリシアがヘレネに対しての誓いがある」
これはパリスには聞こえないようにして呟いた。
「戦争になるか。ギリシアとの」
彼はそのことを覚悟した。カサンドラの予言を信じてはいなかったが。そしてカサンドラの予言も彼の危惧も当たることになった。トロイアにギリシアの大軍が押し寄せて来たのだ。
「来た、やはり」
カサンドラはトロイアの高い城壁の上からギリシアの大軍を見て呟く。大地を埋め尽くさんばかりのその大軍はそこに見えるだけで全てを圧してしまいそうだった。

第四章

「このトロイアに」
「何、姫様案じなさいますな」
「そうです」
しかし彼女の周りにいるトロイアの兵士達は強気だった。
「このトロイアは難攻不落」
「神々とても陥落させられることはできません」
実際にアポロンやアルテミス、アーレスといった神々の加護を受けての城壁である。トロイアにはオリンポスの神々の多くが力を授けてもいるのだ。
「ですから。あの大軍といえど」
「我等には適いません」
「貴方達はそう思っているのですね」
だがカサンドラは彼等の自信に満ちた言葉を信じてはいなかった。
「私は。それは」
「何故そこまで悲しんでおられるかわかりませんが」
「御安心下さい」
彼等はあくまで強気である。カサンドラの予言を信じてはいないからこそ。
「我等もいます」
「そしてヘクトール様も」
「ヘクトール兄様・・・・・・」
長兄の名を聞いたその時だった。またしてもカサンドラの脳裏に宿った。誰も信じず、そのうえ決して外れることがないあの忌々しい予言が。それは。
「兄様はこの戦いで」
「!?この戦いで」
「ヘクトール様がどうされるのですか?」

「倒されます」
彼女はその予言を告げた。
「ギリシアの英雄アキレウスによって」
「アキレウス！？あの」
「不死身と言われる」
「そうです。ですから兄様はアキレウスと戦ってはなりません」
こう告げるのである。
「決して」
「何、大丈夫ですよ」
「ヘクトール様です」
彼等は言うのだった。
「あのヘクトール様が倒される筈がありません」
「英雄ヘラクレスやテーセウスとの力比べにも互角だった方です」
実際に彼等がトロイアにやって来た時にそれを行い互角だったのである。
「ですから。アキレウスといえど」
「敗れる筈が」
「やはり。今の予言も」
誰も信じることがなかったのだった。
「私の予言を信じる者は。やはり」
「とにかくです」
「カサンドラ様」
彼等はそんなカサンドラの嘆きなぞ知る由もなく落ち着き払った声で彼に言うのであった。
「御安心下さい」
「そうです」
「何を安心せよというのですか？」
憂いに満ちた顔を彼等に向ける。しかしそれでも彼等には届かないのだった。
「私に。何を」

「ヘクトール様がおられますし」
「我等もいます」
だからだというのである。
「それにアキレウスは来ておりません」
「アキレウスは」
「そうです。どうやらギリシアでも色々と事情があるようで」
「それで」
これは事実だった。アキレウスはこの時ギリシア陣営のある者と衝突しトロイア遠征には加わっていなかったのだ。トロイアの者達もそれを知っているのだ。
「アガメムノン王もいてオデュッセウスもいますが」
「それでもアキレウスがいないギリシアなぞ恐れることはありません」
「本当にそう思われるのですね」
彼等は全く信じなかった。
「貴方達は」
彼女にだけわかることだったのだ。戦いは確かにトロイア優勢のうちに行われた。アキレウスを欠いているギリシア側はトロイアの堅固な護りを突き崩すことができない。ヘクトールの存在もありトロイアは凌ぎきるかと思われた。だがそれは儚い夢に思った。
ある日突如としてギリシア側から喚声が起こった。それを耳にしたトロイアの者達がいぶかしみながら彼等の陣を見ると。あの男がいたのだ。
みらびやかな黄金色の鎧に身を包み緋色のマントを羽織った美丈夫、それは紛れもなくアキレウスだった。何と彼がトロイアの戦場に姿を現わしたのである。
「アキレウスが来たぞ！」
「アキレウスだ！」
ギリシア側もトロイア側も驚きの声をあげずにはいられなかった。

第五章

「これで我等の勝利だ！」
「勝利は約束されたぞ！」
一気に士気あがるギリシア軍。それに対してトロイア側は狼狽を隠せない。ヘクトールはそれを受けて自らアキレウスとの一騎打ちを挑むことにした。しかしそれはカサンドラが必死に止めた。
「なりません、それは」
こう言って兄にすがりついて止めるのだった。
「アキレウスとの勝負は。なりません」
「何故だ、カサンドラ」
泣きながら己の衣にすがりつく妹に対して問うた。
「私が敗れるというのか？」
「そうです」
涙に濡れた顔で兄を見上げながら言うのである。
「ですから。それは」
「馬鹿な、そんなことはない」
「そうだ、ヘクトール様が敗れることはない」
しかしヘクトールの周りにいる将校達は口々にこう言って彼女の言葉を否定するのだった。やはり彼等も彼女の予言を信じないのだった。
「カサンドラ様、お気持ちはわかりますが」
「ですが」
彼女は妹として兄を心配しているのだと思った。そしてそれはヘクトールも同じであったのだ。
「カサンドラ。気持ちは嬉しいが」
「行かれるのですか？」
「アキレウスの相手をできるのは私だけだ」
こう言うのである。

「だからこそ。行こう」
「アキレウスは不死身です」
カサンドラはあくまで兄にすがり告げた。
「ですから。兄様では」
「不死身でも私は行く」
半ば死を覚悟した言葉であった。
「それだけだ」
「ヘクトール兄様ではなくです」
ここでまた。カサンドラに予言が降りた。その予言を今告げるのだった。
「パリス兄様でなければ」
「私が！？」
「そうです。パリス兄様は弓の名手」
このことは広く知られていた。ヘクトールもまたその弓の腕はかなりのものだがそれでもパリスは兄のそれを上回っていたのである。ギリシア軍も彼の弓に悩まされ続けているのだ。
「ですから。弓でアキレウスと勝負されれば」
「勝てるというのか」
「その通りです。アキレウスにも弱い場所があります」
予言をさらに語り続ける。
「その足の腱。そこを狙うのです」
「そこを弓で撃てばいいのだな」
「そうです」
はっきりと語る。
「それで。ですからヘクトール兄様ではなくパリス兄様が」
「確かにそれもいいだろう」
パリスはまずは妹の言葉を受けはした。
「だが」
「だが？」
「兄上が行かれるというのだ。私がここで出ては」

「そんな・・・・・・」
彼もまたカサンドラの言葉を信じていなかったのだ。やはりと言うべきか。次兄のその言葉を聞いてカサンドラの絶望はいよいよ大きくなろうとしていた。
「それでは・・・・・・」
「どうされますか、兄上」
パリスは絶望するカサンドラをよそに兄に対して問うた。
「やはり兄上が行かれますね」
「そうだ。私でなければあの男の相手はできまい」
彼もまたこう返すのだった。
「だからこそ。今は」
「わかりました。それでは」
「うむ」
話が決まろうとしていた。カサンドラの絶望はそのまま奈落にまで落ちようとしていた。しかしだった。ここで将校の一人が出て来たのであった。
「お待ち下さい」
「むっ！？」
「そなたは」
「イオラトステス」
ヘクトールが彼の名を呼んだ。その茸を思わせる髪型の若い将校であった。
「どうしたのだ？一体」
「ここはカサンドラの言われることに理があるかと存じます」
彼は畏まって一礼したうえでこう述べるのであった。
「カサンドラのか」
「はい。アキレウスは確かに剛勇無双の者」
「その通りだ」
ヘクトールは彼の言葉に返す。これはもう言うまでもなかった。
「ですが弓となるとパリス様に分があります」

「私にか」
「トロイアにはアポロン神とアルテミス神がそれぞれついておられますね」
「その通りだが」
「それもあります」
彼はその二柱の神の名も挙げてきた。
「弓の神である御二人が」
「では二柱の神々の御加護もあるからこそ」
「ここはアキレウスに弓の勝負を挑むべきと思います」
あらためて二人に告げた。
「それで如何でしょうか」
「そうだな。言われてみれば」
パリスは考える顔になった。そうしてそのうえで再び口を開いた。

第六章

「では私が行く方がいいか」
「パリス、いいのか」
「兄上、ここはお任せ下さい」
彼は強い声で兄に答えた。
「私が見事アキレウスを倒して御覧にいれましょう」
「そうか。それならばだ」
「はい。ではイオラトステスよ」
「はい」
「そなたの提案受けよう」
毅然とした声でイオラトステスに告げた。
「その言葉をな」
「有り難き幸せ」
「アキレウスはギリシアきっての英雄」
パリスもそれはよくわかっている。だからこそその表情は厳しいものになっていた。しかし彼も王族であり尚且つ己の腕には自身があった。退くつもりはなかった。
「あの男を倒せばギリシアには勝利したも同じだ」
「そうです。だからこそ」
イオラトステスはまたパリスに話した。
「ここはパリス様が」
「あの男の足の腱を撃とう。それでいいのだな」
「その通りです」
こうしてアキレウスの相手はヘクトールではなくパリスが務めることになった。すぐにギリシア側に一騎打ちを申し出、ギリシア側もそれを受けた。翌日の正午からの開始となった。
カサンドラはまずは長兄が助かったことに安堵した。だがここでまたあることを思うのだった。

「けれど」
己の予言のことである。
「どうしてあの若い士官は」
イオラトステスの名はまだよく知らなかった。
「私の言葉を信じてくれたの？まさかあの人こそ」
ふとそう思う。だがそれはすぐに打ち消した。
「いえ」
首を横に振って言うのだった。
「そんな筈がないわ。この世で一人だけだというのに」
アポロンの呪いを思い出しての言葉である。
「それなのに。このトロイアにいるなんて」
そのことを信じていなかったのだった。今は希望を自分で打ち消す。そうしてとりあえずはヘクトールが救われたことを一人喜ぶ。その次の日の正午。トロイアの正門前にパリスは立っていた。向かい側、ギリシア軍を背にしてアキレウスが立っている。
「アキレウス殿だな」
「その通り」
アキレウスはパリスを見据えつつ答える。既に二人はその手に弓を、背に矢を入れた筒を装備している。互いに申し出を守っていた。
「私がそのアキレウスだ」
「私の名はパリス」
パリスもまた己の名を名乗った。アキレウスを見据え臆するところがない。
「トロイアの第二王子にして将軍の一人だ」
「話には聞いている」
アキレウスもまた臆してはいない。それどころか言葉の一つ一つからも自信が見える。二人共鎧も株とも身に着けず弓矢を扱い易い軽装だがアキレウスは最初から鎧も兜も不要と言わんばかりであった。己の不死身の身体のことを知っているからこそであろうか。
「トロイア一の弓の使い手だな」

「トロイア一ではない」
だがパリスもまたそのアキレウスに負けない程の自信をここで見せた。
「私の腕はな」
「では何だ？」
「この世界で最もだ」
こう言うのであった。
「私に弓で勝てるのは偉大なるアポロン、アルテミス両神だけだ」
「言うものだな。神に次ぐか」
「そうだ。だからこそ見せよう」
言いながら背中に手を回した。そこにある矢を手に取る。
「今ここで。その弓を」
「望むところ」
アキレウスも彼と同じ動作をする。いよいよだった。
「一つ言っておく」
「何だ？」
アキレウスの言葉に応える。二人の間の中空に黄金色の日があり青い空と黄の大地を照らしている。城壁にはトロイア軍、その向かい側にはギリシア軍がいてそれぞれ二人を見守っている。どちらもこの一騎打ちの行く末を固唾を飲んで見ているのだった。
「私に敗れたことは恥ではない」
「どういうことだ？」
「私は不死の身体を持っている」
やはり言うのはこのことだった。
「如何なる刃も私を貫くことはできず槌もまた跳ね返す」
「弓もか」
「無論だ。それがなくとも私の力と技は誰にも敗れたことはない」
自信の源は不死の身体だけではないのだった。
「その私に敗れてもな。それは言っておこう」
「果たしてそうかな？」

だがここでパリスは不敵な言葉を口にするのだった。
「果たして。貴殿の言葉通りになるか」
「私は嘘は言わぬ」
「ではその言葉を嘘にしてみせよう」
互いに弓を構えつつの言葉だった。
「今ここでな」
「ならば」
「参る」
いよいよだった。
二人の弓が極限まで引かれそのうえで矢が放たれる。二人は同時に弓矢を放った。パリスは弓矢を放つと同時にすぐに身体を右に捻ってみせた。
既にアキレウスが自分の身体の何処を狙っているか読んでいたのは。それは左の胸だ。外すことのないアキレウスの弓でも何処を狙っているかわかればかわすことは彼にとっては容易いことだったのだ。
だからこそかわすことができた。矢はアキレウスのものの方が速かった。放つと同時にもう身体を右に捻ったパリスの側を通り抜けトロイアの壁に突き刺さった。その石の壁さえも半ば貫いていた。恐るべき力だった。

第七章

だがかわされたのは事実だ。アキレウスはそれを見て再び矢を出し放とうとする。
「今度は外さんぞ」
「残念だがそれはない」
「残念だと？」
「そうだ。見よ」
ここでパリスは身体を元の体勢に戻しつつアキレウスに言うのだった。
「貴殿の足を」
「足！？」
「そうだ。見ろ」
また彼に告げる。
「その足をな」
「むっ！？」
見れば今そこにパリスの矢が迫っていた。最早かわすことはできない。しかしアキレウスはあえてその矢をかわすことなく再び構えるのだった。
「足を貫こうというのか」
「その通りだ」
パリスは構えない。そのままの姿勢でアキレウスに告げる。
「普通の者でも足を貫かれた程度では死ぬことはない」
「その通りだ」
アキレウスもそれは承知していた。
「そしてこの私は」
「確かに不死身だ」
もうそれは言うまでもないことだったがパリスはあえて言った。
「しかしだ」

「しかし？」
「それは一つだけ違う」
今カサンドラの言葉を彼に告げた。
「そこは」
「そこは！？」
「腱だ」
この言葉と共にパリスの矢がアキレウスの足の腱を前から貫いた。丁度右の足首の前から後ろにだった。パリスはそこを的確に貫いたのである。
「ぐっ・・・・・・」
「こういうことだ」
厳然とした声でアキレウスに告げた。普段の流麗な美声とは違っていた。
「これで。貴殿の最期だ」
「馬鹿な、私が死ぬだと」
「完全に不死身の者なぞいない」
パリスはさらに厳然な言葉を述べた。
「神でない限りな」
「む、無念・・・・・・」
こうしてギリシアの英雄アキレウスは死んだ。トロイアにとっては会心の勝利でありギリシアにとっては痛恨の出来事だった。だが。カサンドラはここでまた予言を聞いたのだった。
「ギリシアは仕掛けてきます」
「ギリシアがか」
「そうです」
こうトロイアの者達に話すのだった。
「木馬で」
「木馬！？」
「そうです」
そこにあるものを見ながら語る。彼女にだけ今目の前に見えるも

のを。
「オデュッセウスです」
「オデュッセウス！？」
「誰だ？」
トロイアの者達の中には彼のことを知らない者さえいた。するとすぐにこう返ってきた。
「確かギリシアの王の一人だった筈だ」
「ギリシアのか」
「何でも相当知恵の回る男らしいぞ」
「ふむ、知恵者か」
まずそのことはわかった。しかしだった。
「だがどの様な知恵も以ってしてもこのトロイアはな」
「そうだ。陥落させることはできない」
彼等はここでもトロイアの城壁の堅固さを確信していたのであった。それは考えようによっては妄信だったがそれでも信じているのは事実だった。
「何があってもな」
「だから大丈夫だ」
「何をしても落ちはしない」
彼等は口々に言う。そのうえでまたカサンドラに顔を向けて言うのだった。
「姫様、何があろうとも御安心下さい」
「トロイアの城壁は難攻不落です」
「しかも神々の御守護があります」
それも事実だった。彼等に味方する神々も多い。しかしカサンドラはそれも言うのだった。
「馬です」
「馬！？」
「馬でこのトロイアの城壁を！？」
「まさか」

やはり彼等は信じない。
「馬で城を攻めるなぞ」
「まず無理です」
あくまで常識で考える彼等だった。彼等も馬に乗りやって来て戦うスキタイの者達は知っていた。しかしそれでも彼等が城を攻めることができないというのだ。
「あれは平地で使うものです」
「どうして城に？」
「贈り物・・・・・・」
カサンドラは今度はこう呟いた。
「贈り物の中に。彼等がいて」
「贈り物の中に馬が？」
「まさか」
「いえ。木馬です」
次に出た言葉は木馬だった。
「トロイアに贈る巨大な木馬の中に。ギリシアの者達がいて」
「何かよくわからないな」
「巨大な木馬！？」
「何だそれは」
やはり首を傾げる彼等だった。そしてここでも誰もカサンドラの言葉を信じないのであった。
「とにかくだ。アキレウスは倒れた」
「うむ」
このことが彼等に勝利を確信させてもいた。それが驕りにもなっていたのだ。彼等はここで大きく楽観論に傾き言うのであった。
「ギリシアはもう打つ手がない」
「そうだな。講和を提案してみよう」
「我々にとってかなり有利な」
こう言い出したのだった。カサンドラの言葉を聞かずに。
そしてそれを王に進言する。彼もまたカサンドラの言葉を信じて

おらずトロイアの勝利を確信していた。だからこそ彼も決断を下した。

第八章

「よし。ではギリシアから多くの土地と貢物を差し出させ」
「はい」
「それで講和としよう。すぐにギリシア側に告げよ」
「わかりました」
　こうしてトロイアはギリシアに講和、それも彼等にとってかなり有利な条件を提示したうえでのものを提案した。その中にはヘレネをトロイアの者とする条件もありギリシアにとっては甚だ屈辱的なものであった。しかしそれでもギリシア側はその講和を無条件で受け入れたのであった。
「おかしいな」
　最初にこれを妙だと思ったのはヘクトールだった。
「あのプライドの高いヘレネスがあの条件を全て受け入れるとは」
「確かに」
「それは」
　彼の側近達も同じ様にいぶかしんだ。
「それも戦争の元のヘレネ殿までこちらに引き渡すなぞ」
「あまりにも妙です」
「私もそれはないと思っていた」
　ヘクトールがこの講和をいぶかしむ理由はそこにあった。
「だが。それでもだ」
「はい」
「彼等は首を横に振りました」
　側近達は口々に言う。
「何かあるのでしょうか」
「ギリシアに」
「そうなのかもな」
　ヘクトールもまたカサンドラの予言を信じてはいない。だが彼は

それとはまた別の、彼自身の持つ聡明さでそれを察していた。そうしてここで言うのだった。
「とりあえずはだ」
「どうされますか？」
「民達はできるだけすぐに街から避難できるようにしておけ」
「街からですか」
「このトロイアからだ」
こう言うのである。
「よいな。それで」
「何かあった時の為ですね」
「アキレウスは倒れた」
ギリシア側にとっては痛恨の出来事であり今トロイア側が強気に出られるようになっている根拠だった。しかしヘクトールはそれに楽観していなかったのだ。
「まずはな」
「確かに」
「しかしギリシア側にはまだ多くの英雄がいる」
「そういうことですね」
「英雄だけではない」
彼はこうも側近達に告げた。
「神々もだ」
「神々も」
「ヘラ神とアテナ神がまずあちらにおられる」
パリスに選ばれなかった二柱の女神達だ。まず彼等がギリシア側にいるのである。
「そしてゼウス神やポセイドン神もな」
「あの普段は仲の悪い御二人までもが」
ゼウスとポセイドン、それにハーデスは兄弟でありそれぞれ天界、海界、冥界を治めている。オリンポスの神々とはゼウスが治める天界の神々であると言ってもいい。それに対して後の二人はそれぞれ

別の世界の主神なのだ。そういった事情があり三柱の神々の仲は決して良好とは言えないものがあるのだ。それは彼等もよく知っていることであった。
「それに馬だったな」
「はい、馬です」
「馬はポセイドン神のものだ」
ポセイドンは海だけではなく馬の神でもあるのだ。
「余計に気になる。ここは」
「やはり油断は禁物ですか」
「我等だけでも備えを解くな」
ヘクトールは側近達に告げた。
「いざという時にはだ。よいな」
「はっ、それでは」
「そのように」
「そういうことだ。それではな」
「わかりました」
こうしてヘクトールの側近達と兵達は危急に備えることにした。トロイアとギリシアの講和は滞りなく結ばれギリシア側からまず多くの貢物を贈ることになった。その中にこれ以上はないという程の大きな木馬があるのを見てカサンドラはその整った顔を蒼白にさせた。
「やはり・・・・・・木馬が」
「仰る通りですね」
しかし彼女の横でこう言う者がいた。
「カサンドラ様の」
「えっ！？」
「カサンドラの仰る通りですね。やはり」
「貴方は確か」
その若い士官の顔には見覚えがあった。あの時ヘクトールとアキレウスの一騎打ちではなくパリスがすべきと進言したあの士官だ。

その名は。
「イオラトステスです」
謹んで礼を述べたうえでの言葉だった。
「以後お見知りおきを」
「イオラトステスですね」
「はい、そうです」
「わかりました。それで」
カサンドラはあらためて彼に声をかけた。
「貴方はあの木馬をどう思われますか？」
「カサンドラ様と同じです」
木馬を見上げながら答えるイオラトステスだった。
「やはりあの木馬は」
「そうですか。貴方は」
「私は。信じます」
彼の方から言ってきた。
「カサンドラ様の御言葉を」
「えっ！？」
「信じています」
こう言うのである。
「貴女の予言を。必ず当たるのだと」
「貴方は・・・・・・まさか」
ここに来てようやく出会えたことがわかった。彼こそはこの世でただ一人自分の予言を信じてくれる者だったのだ。それはトロイアにいたのだ。カサンドラは今このことを知り喜びを感じずにはいられなかった。
しかしであった。もう木馬はトロイアの中に入ってしまっている。皆それを貢物だと思い早速宴の用意をはじめている。危機は目前に迫っていた。
「けれど・・・・・・もう」
「既に私の兵達は持ち場に着かせています」

だがここでイオラトステスはこう彼女に話したのだった。
「何が起ころうとも。御安心下さい」
「何が起ころうともですか」
「そうです。せめてトロイアの者達だけは」
強い声での言葉だった。
「救いましょう。何があっても」
「・・・・・・はい」
少しだけ明るい顔で頷くことができた。最早トロイアの滅亡は避けられないことはわかっていた。だがそれでもトロイアの者達だけは。彼女はそこに希望を見出せるようになっていたのだ。

第九章

真夜中だった。突如木馬の腹が開きそこからギリシアの兵達が雪崩れ出た。彼等は瞬く間に木馬の周りで酔い潰れている者達を切り次に城門を開けた。そこから待ち構えていたギリシア軍が雪崩れ込みトロイアを瞬く間に陥落させてしまった。

「ギリシア軍だ！」

「ギリシア軍が来たぞ！」

兵達が慌てて叫ぶ。しかしその彼等からまず殺され城内は阿鼻叫喚になっていく。

パリスが討たれ王も王妃も宮殿の中で炎に包まれる。その炎が誰によるものかはわからない。

市民達は血に酔うギリシアの兵達に襲われる。しかしその彼等の前にある男が姿を現わした。

「この者達はやらせぬ！」

ヘクトールだった。彼は己の危惧が当たってしまったことに歯噛みしながらもそれでも武器を手に己の部下達を率いギリシア軍を防いだ。そうして門の一つを護りそこからトロイアの者達を逃がした。

「逃げろ！そこから逃げろ！」

「ヘクトール様！」

その彼に一人の若い将軍が声をかける。

「ギリシア軍は宮殿を焼いています！」

「父上は如何された！？」

「・・・・・・・・・・」

将軍は無念の顔で首を横に振るだけだった。それが何よりも意思表示だった。

「おそらくは」

「そうか。では母上も」

「パリス様は討たれました」

彼は次にパリスのことを述べた。
「見事なお最期でした」
「そうか。ならばよい」
「パリス様、ここは私が」
将軍は続けてこう名乗り出た。
「ですからお早く。お逃げ下さい」
「いや、私は最後にする」
しかしヘクトールはこう言って彼の申し出を退けた。
「最後の最後まで。ここを護る」
「トロイアの者達をですか」
「そうだ。アイアネアース」
ヘクトールは彼の名を呼んだ。
「そなたはここから脱出したトロイアの者達を集めよ」
「私がですか」
「今それができるのはそなたしかおらぬ」
だからだというのである。
「だからだ。わかったな」
「ヘクトール様・・・・・・」
「トロイアは敗れた」
ヘクトールの目の前では業火に燃え盛る宮殿とトロイアの街がある。人々は逃げ惑い泣き叫びギリシアの兵士達の雄叫びが夜の闇の中に聞こえ煙の中で人々が彼等の剣に倒れていく。それを防ごうとするトロイアの兵士達もその中に飲まれ次々と倒れていく。敗北は明らかだった。
「だが生き残る。何があろうともな」
「だからですか」
「そうだ。だからこそだ」
あらためてアイアネアースに顔を向ける。顔の半分が業火の輝きを受けて赤くなっている。そしてもう半分は夜の闇で暗く。人ツの顔でありながら二つの色に彩られていた。

「そなたが行け。いいな」
「わかりました。それではまた」
「然る場所で落ち合おう」
今はこう言うだけであった。
「よいな」
「はっ」
ヘクトールの言葉に対して頷きそのままそこから姿を消すアイアネアースだった。ヘクトールは剣を手に戦いギリシアの兵達を寄せ付けない。そうしてトロイアの者達を少しでも多く逃がすのだった。目の前に天にまで届かんばかりの紅蓮の炎を見ながら。祖国を焼き尽くさんとするその炎を。
カサンドラはイオラトステスと共にトロイアの中を逃げ惑っていた。その間多くのギリシアの兵達に襲われたがその度にイオラトステスの剣が煌き彼等を退ける。そうして遂にトロイアの城壁のところにまで来た。
「ここからです」
「ここから？」
「そうです。ここから飛び降りれば助かります」
イオラトステスは必死に駆けながら後ろにいるカサンドラに対して声をかけた。右手に血塗られた剣を持ち左手で彼女の手を掴んでいる。何としても離すまいとこれ以上になく強く握っている。
「ですから」
「けれどトロイアの高い城壁は」
「御安心下さい」
彼は言うのだった。
「その場所は下は川になっていますから」
「川！？ではあそこですね」
「そうです。あそこです」
トロイアの者ならばこれでわかることだった。街のすぐ側を流れているその川なのだ。トロイアの者達の水瓶にもなっていた川だ。

「あそこなら飛び降りても」
「それでは。今から」
「はい、もうすぐです」
また答えるイオラトステスだった。
「ですから。宜しいですね」
「ええ。それでは」
カサンドラもまた必死に駆けながらイオラトステスの言葉に頷く。しかしだった。
前と後ろからギリシアの兵達が現われた。あともう少しというところで。
「待て！」
「降伏せよ！」
彼等は口々に叫びながら二人に迫る。その手に持っている剣や槍は城を焦がす炎により朱に映し出されている。身に着けている鎧や兜も真っ赤になっている。
「そうすれば命は取らぬ」
「だが」
「イオラトステス・・・・・」
カサンドラは彼等が自分達に迫るのを見て顔を蒼白にさせた。ここまで来て、そうした思いもあり絶望に心を支配させていった。
「もう。これで」
「いえ、ご案じなさいますな」
しかしここでイオラトステスはこう言うのであった。

第十章

「姫様」
「ええ」
「ここから飛び降りて下さい」
すぐ側の城壁を見て言う。
「ここから。ここからならば川に飛び込むことができます」
「川に」
「その間は私は引き受けましょう」
微笑んで彼女に言うのだった。
「ですから。今のうちに」
「引き受ける！？けれど」
「申し上げた筈です。ご案じなさいますな」
ここでも微笑んでの言葉であった。
「私も後から必ず行きます」
「必ずですね」
「はい、必ず」
こう言いながら迫り来るギリシアの者達に剣を振るう。早速一人倒した。
「くっ、こいつ！」
「降伏しないのか！」
「さあ姫様！」
ギリシアの兵達の相手をしながら背中にいるカサンドラに声をかける。
「今のうちに！」
「けれど」
カサンドラはイオラトステスの声に対しても戸惑いを見せる。既に彼は複数のギリシア兵倒しているが彼等は次々と城壁に現われてきていた。

「貴方は」
「私のことは御心配なく」
彼は前を見つつカサンドラに述べる。
「必ず。生きて姫様の御前に戻りますので」
「必ずですか？」
「はい、必ずです」
また答えるのだった。
「ですから。今は」
「けれど貴方は」
「申し上げた筈です」
また答えるのであった。
「早く。どうか」
「・・・・・・わかりました」
カサンドラもここに至ってようやく彼の言葉に頷いた。最早一刻の猶予もならなかった。それがわかっているからこそ彼女も決断しなければならなかった。
だからこそ。ここで彼女はまた彼に言った。
「それでは必ずですよ」
「私は約束を破ったことはありません」
「その言葉。信じさせてもらいます」
「勿論です、ですから」
「・・・・・・はい」
また彼の言葉に頷く。
「それでは。また」
「御会いしましょう」
カサンドラは城壁から飛び降りそのまま川に入った。そこを泳ぎ落ち延びた。彼女はやがてトロイアの者達の声を聞きそこに向かった。まず彼を出迎えたのはアイアネアースであった。
「カサンドラ様、御無事ですか」
「はい」

これで何とか自分が助かったのを確認した。まずそれは確かだった。
見れば多くのトロイア人達が夜の中に集まっている。彼等は何とか逃げ延びたのだ。
しかし。その中に彼女の家族はいなかった。ヘクトールも姉妹達も。誰もいなかった。
「兄様達は」
「ヘクトール様は城門におられました」
アイアネアースが周りを見る彼女に答えた。
「そこで我々を逃がす為に戦っておられました」
「そうですか。城門で」
「そうです」
沈痛な声でまたカサンドラに答えた。
「ですが。今は」
「どうなったのかわかりませんか」
「おそらくは」
アイアネアースは首を横に振った。俯きどうしても上げられなかった。
「そうですか。兄様は」
「王様も奥方様も」
二人についても語るアイアネアースだった。
「宮殿の中で」
「お父様もお母様も」
「パリス様は戦死されました。姉君様達や妹様達は」
「どうなったのですか？」
「何とかここに逃れられました」
「そうですか」
それを聞いてまずは安堵するカサンドラだった。
「皆。無事ですか」
「はい」

「それは何よりです。けれど」
「けれど。何か」
「イオラトステスは」
トロイアの方に顔を向ける。トロイアは業火で燃え盛り続けている。そのトロイアの方からトロイアの者達がまばらに逃れてくる。しかしその中にイオラトステスはいないのだった。
「いないのですか」
「何かあったのですか？」
「助けてくれました」
俯いてアイアネアースに答える。闇の中で周りにトロイアの者達が疲れ果てた顔で集まろうとしている。思ったより助かった者は多かった。しかしイオラトステスの姿はなかった。
それでもカサンドラは探す。彼がいるかどうか。やがての中で一人の姿を見た。それは。
「あれは」
「イオラトステス・・・・・・」
腕に深い傷を負いふらふらとしながらだがカサンドラの方に来ていた。頭から血を流し鎧もマントも汚れているがそれでも彼は無事だった。
「姫様・・・・・・」
「イオラトステス・・・・・・」
カサンドラは彼が自分の側まで来たのを見てまた声をあげる。
「無事だったのですね」
「助かりました」
こう答えるのだった。
「ヘクトール様が。危ういところで」
「兄様が」
「はい。私を取り囲むギリシア兵達を倒されて。私を」
「そうなのですか」
「ですが」

顔を俯けさせての言葉だった。彼もまた俯くのだった。
「ヘクトール様は。そのままギリシア兵達を倒され城壁まで迫った業火に」
「・・・・・・左様ですか」
「申し訳ありません」
うなだれるしかないイオラトステスだった。
「ヘクトール様は。お助けできませんでした」
「いえ」
だがカサンドラはイオラトステスに言うのだった。

第十一章

「兄様は。命を賭けて貴方をお救い下されたのです」
「私をですか」
「そうです」
こう彼に告げるのだった。
「あの方は。その為に全てを賭けられたのです」
「ヘクトール様は」
「一度は貴方に助けられ今度は貴方を助けられた」
また彼に告げた。
「ですから」
「そうですか・・・・・・」
「ヘクトール兄様はトロイアの為に全てを捧げられました」
兄を純粋に褒め称える言葉であった。
「そして私の為に貴方を」
「私を」
「ここに導いて下されました。私の為に」
「カサンドラ様・・・・・・」
「アイアネアース殿」
イオラトステスに語り終えた後アイアネアースに顔を向け声をかけるのだった。
「これからはどうされるのですか？」
「まずは生き残ったトロイアの者達を集めます」
彼はこうカサンドラに答えた。
「そして」
「そして？」
「新たな国を築こうと思っています」
「新たな国をですか」
「トロイアは滅びました」

これはもう否定しようがなかった。トロイアは今も燃えている。
それこそがトロイア滅亡の何よりの証であった。
「ですが。我々は生きています」
「はい」
アイアネアースのその言葉に頷いた。
「ですから。今から何処かに」
「トロイアは」
そしてここでまた。カサンドラに予言が降りた。
「トロイアは」
「カサンドラ様、まさか」
「はい」
イオラトステスの言葉に対して答える。
「予言が。予言が降りました」
「今度は一体どういった予言ですか？」
「西に行きましょう」
こう告げるのだった。
「西に。そして海を渡り」
「海を」
「シチリアを北に上りそこから陸にあがり街を築きましょう。その新たな土地で」
「シチリアを右にですね」
「そうです。そこです」
イオラトステスに対してだけだったがそれは自然とトロイアの者達にも届くのだった。彼の口を通して。
「トロイアはそこで蘇ります。あらたな街として」
「アイアネアース様」
イオラトステスは実際にアイアネアースに対して告げる。
「行きましょう、西に」
「西か」
「そして海を渡り新たな地へ。我等の新たな地へ」

「そうだな。最早トロイアはない」
まだ燃え盛っている。そこから逃げ延びてくる者達はまだいる。しかし街は潰えたのは疑いようがなかった。燃え盛る炎がそれを教え続けている。
「それでは。やはり」
「はい。ここを去り」
彼はさらにアイアネアースに話す。
「行きましょう、新たな地へ」
「うむ。そこで再び栄華を取り戻そう」
彼は決めた。新たな地へ向かうことを。イオラトステスは彼のその決意を見届けてからまたカサンドラに顔を向けて言うのであった。
「では我々も」
「その新たな地へ行くのですね」
「お嫌ですか？」
「いえ」
イオラトステスの今の問いには首を静かに振って答えた。
「私も。もう悲しみしか残っていないこの場所を離れ」
「あらたな場所でまた幸せを」
「そうしたいと思っています。けれどそれは」
あらためてイオラトステスに顔を向け。そのうえでまた述べるのだった。
「私だけではなく」
「姫様だけでなく」
「貴方と共に。二人で」
そっと彼の方に手をやると彼は微笑んでその手を受けた。そうして二人は生き残ったトロイアの同胞達と共に悲しみの大地を去るのであった。

カサンドラ　　完

2008・11・25

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8431f/

カサンドラ

2010年10月8日15時53分発行